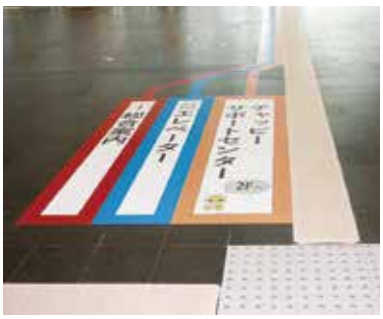
人権さんだ

6月号
令和4年(2022)
No.519

インクルーシブ社会とは

《問い合わせ》
共生社会部福祉共生室人権共生推進課
TEL：559-5148　FAX：563-7776
E-mail：jinken_u@city.sanda.lg.jp



色別に誘導されるので行きたい場所に容易に行ける（総合福祉保健センター内）

私たちは人にやさしい社会の姿として、物理的にも心理的にも段差のない「バリアフリー」化に取り組んできました。

最近は「インクルーシブ社会」という言葉をよく聞きます。これは性別・国籍・宗教の違いや障害の有無にかかわらず、多様性を認め合い、共に安心して暮らすことができる社会の姿を言います。また日常生活の中で、新聞やテレビなどでSDGs（持続可能な開発目標）という言葉やロゴマークを見かけることも増えました。

今号では、インクルーシブ社会について考えます。

UD FONT
見やすいユニバーサルデザインフォントを採用しています。

誰一人取り残さない

SDGs（持続可能な開発目標）は、2015年に国連で採択された国際目標です。17の目標が示されており、世界各地で課題となっている貧困や飢餓、戦争や難民、環境破壊やジェンダー平等など、国際的な問題を取り上げています。

これらの課題に取り組む際、「誰一人取り残さない」、そして「最も遅れているところへ第一に手を伸ばす」ことが重要とされています。最も困難な状態に置かれている人々やこれまで支援が届いていなかったところ、具体的には子ども、若者、障害がある人、女性、高齢者などを優先していくことが大切であると位置づけられたのです。

私たちの周りでも、ユニバーサルデザイン（みんなにやさしいわかりやすいデザイン）を取り入れた設備や生活上の困難を取り除く具体的な取り組みが行われてきています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

災害時、「避難所」で

大規模な自然災害が発生すると私たちの生活は一変します。緊急時の行動について平時から準備しておくと同時に、災害時の人々の生活の変化や心の問題も避けられない課題となるでしょう。多くの人が利用する「避難所」はどうあるべきか、考えてみましょう。

避難所での生活で「困り感」のない人はいません。みんなが突然の出来事に戸惑い、どうすればよいのか判断が難しくなることは当然ですが、その中でもみんなから取り残されてしまう可能性のある人がいます。

避難所には、仮設トイレやベッド、水や食料品、プライバシー確保の仕切り板、衣類や寝具など、必要な物品の確保が必要であり、それらがみんなに平等に行き渡ることが求められます。

しかし、それらが一律に平等であるだけでいいのでしょうか？

例えば、視覚障害のある人にとっては、たった1センの段差でも大きな障壁になります。性的マイノリティの人が、トイレの利用をためらってしまうなどの課題に、私たちがまず気づくことが大切だと考えます。

そして全ての人が完全に避難することができて、誰一人取り残さずに命を守ることが大切です。

＜避難所運営上の配慮を必要とする例＞

① 女性・・・・・・・・・・・・出産をひかえた人
② 乳幼児や子ども・・・・・・障害やハンディがある子ども
③ 高齢者・・・・・・・・・・・移動・食事などの介助や支援が必要な人
④ 障害者・・・・・・・・・・・障害に応じた支援が必要な人
⑤ 病気やけがのある人・・・・医療的ケアが必要な人
⑥ 外国人・・・・・・・・・・・ことばの支援が必要な人
⑦ 性的マイノリティの人・・・プライバシー確保の支援が必要な人

緑色回転灯は災害時、聴覚に障害がある人が目で非常事態を確認できる（総合福祉保健センター）

「分ける」から「ごちゃまぜ」へ

私たちは多様な人たちの生きづらさを解消し支え合う社会を目指して、それぞれの状況に応じた学習や生活の環境を整えてきまし

た。「生きづらさ」を理解し合い、様々な交流事業も活発に実施されるようになりました。これらの取り組みにより、専門的な相談場所や活動拠点は充実しましたが、同時に「分ける」ことが多くなったところがあります。

最近は、このような「分ける」発想から「ごちゃまぜ」のまちづくりへと転換しようとするところも多くなってきました。

「ごちゃまぜ」のまちでは、障害がある人もない人も、認知症の人もそうでない人も、外国人市民も性的マイノリティの人もみんながお互いに理解し合いながら同じ地域で暮らします。空き家を改修してラーメン屋などの店舗にして、様々な人が働いている取り組み（石川県輪島市）や、「障害のあるなしで分けずに『ごちゃまぜ』でフットサルを楽しもう！」という企画（東京都江東区）など、各地で取り組みが展開されています。

「ごちゃまぜ」の場所では、障害がある人とそうでない人との間でトラブルが起きることもあります。そういうことが起こらないために、きちんと分けた方がよいという意見もありますが、「分ける」ことで問題を避けても解決にはなりません。その時こそ、みんなで想像力を働かせて知恵を出し合いましょう。

私たちのことを私たち抜きで決めないで

ＳＤＧｓは、障害者権利条約の考え方を多く取り入れています。例えば、「私たちのことを、私たち抜きで決めないで」という考え方です。この考え方は障害がある人たちだけに限りません。高齢者や引きこもりの人など、当事者の話抜きでは進みません。

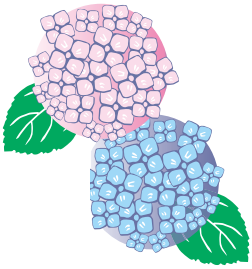
また、自分の思いを聞いてくれる人に出会えず、あきらめてしまう人が少なくありません。

当事者を中心にして、お互いに不便さや生きづらさを分かち合い、支え合える関係を作りたいものです。

編集後記

「共生社会」を実現させるためには、まず身の周りのいろいろな人権課題を知ることが大切です。そのためには想像力を働かせて自分とは異なる人の立場に立ってみることが必要です。

三田市が４月から施行している「（略称）人権共生条例」も、誰もが人権侵害を受けない社会、すべての人を社会的孤立や排除から守り支え合う社会の実現を目指しています。市民一人一人が人権共生の意識を持ち、共に学び合い、支え合う社会を作ることが大切です。「他人ごと」ではなく、「自分のこと」として想像力豊かに暮らしたいものです。



令和３年度 人権標語・ポスター受賞作品

●おともだち
みんななかよし
ぽっかぽか
すずかけ台小学校１年（前年度）
多田瑛香さん

藍中学校１年（前年度）
赤井日向子さん

くらしの人権相談

TEL 559-5062　FAX 559-5063
月曜～金曜　９時～ 17 時（※祝日・年末年始を除く）

専門相談員による性的マイノリティ特設電話相談（予約）

TEL 559-5062　FAX 559-5063
月曜～金曜　９時～ 17 時（※祝日・年末年始を除く）
※専門相談員との相談日は予約後に調整

人権擁護委員による定例人権相談（予約）

TEL 559-5148　FAX 563-7776
《次回相談日》６月 23 日（木）13 時～ 16 時

わたし No.178 出会う 気づく つながる

言葉の壁を越えて
～通じ合いたいという思いを大切に～

三田市立ゆりのき台小学校教員　山下　舞子さん

転入生が来ます

「三日後、ベトナムから転入生が来ます」

当時、1年生を担任していた私は、2学期途中での突然の連絡を受けました。

転入生のAさんは、日本での生活も日本語に触れることも初めてでした。当時の学校には、多くの外国籍児童が在籍しており、私のクラスにもインドネシアから来た児童がいました。しかし、生まれてすぐに日本に移住して来る子が多く、日本語を話すことができました。Aさんのように全く日本語がわからない児童と関わることは初めてでした。私は「コミュニケーションは取れるだろうか」「学習面の支援はどうしたらよいだろうか」「クラスの子と仲良くできるだろうか」という不安な気持ちでいっぱいでした。

言葉が通じない

Aさんとの学校生活が始まりました。主なコミュニケーションの手段は、「翻訳機」でした。喋った言葉を文字と音声で翻訳してくれます。しかし、ベトナムは地方によって言語に多少の違いがあるため翻訳できず、伝えたいことが通じないもどかしさを感じることが多々ありました。Aさんの表情も硬く、尋ねた事にうなずくことはあっても自分から喋ることはありませんでした。私はAさんと個別指導で日本語を教えたり、保護者とは家庭訪問でコミュニケーションをとっていました。「言葉が通じないって大変だ」と思うことがたくさんありました。

もっと仲良くなりたい

そんな時、道徳で外国の人との関わりについての学習をしました。授業の最後に、ある児童が「Aちゃんとベトナム語で喋って、もっと仲良くなりたい」と発表しました。すると、「私も！私も！」とクラスにその意見が広がりました。その日から、調べたベトナム語で挨拶をする子が増えていきました。話しかけられてもうなずくだけだったAさんは満面の笑みで挨拶を返していました。時には、ベトナムの食べ物についてジェスチャーを交えながら楽しそうに日本語で会話をしていました。

心は通じ合える

そんな姿を見て、私は「国籍や言葉にとらわれすぎていたのではないか」とはっとしました。言葉が通じないことを大変だと感じていた自分が恥ずかしくなりました。言葉は通じなくても、「仲良くなりたい」という気持ちがあれば、心は通じ合えるということを子どもたちから学びました。それから、私も通じ合いたいという思いを大切に、Aさんと関わり続けました。Aさんも少しずつ自分から喋るようになり、コミュニケーションがとれるようになりました。そして、修了式の日にはAさんが自分の気持ちをみんなに伝えてくれました。「1年2組が好きだ」という言葉が何よりも嬉しかったです。

～今、思うこと～

この時の経験から、幼い頃から様々な文化に触れることで、多様な個性を偏見なく受け入れることができると思いました。現在担任している学級でも、誰とでも仲良くできる仲間作りを大切にしています。また、この時学んだことは、外国籍の児童だからではなく、すべての人に当てはまるということです。この人と通じ合いたいという気持ちがあれば、その思いは相手にも伝わると思います。これからも、「伝わらないから諦める」のではなく、どの子どもにも全力で向き合い続ける教師でありたいです。

令和３年度 ラブピース４コマまんが受賞作品

「笑顔を増やす一言！」

けやき台小学校６年（前年度）
峰本 星良 さん